

詩篇100篇

0 感謝の賛歌

《神殿に入る人々の歌》

- 1 全地よ。【主】に向かって喜びの声をあげよ。
- 2 喜びをもって【主】に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。
- 3 知れ。【主】こそ神。主が、私たちが造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。

《神殿で迎える人々の歌》

- 4 感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、入れ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。
- 5 【主】はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。

「王としての神」をテーマとした一群の詩篇（93～100 篇）は、本篇をもって締めくくられます。150 篇全体としては3分の2が完了することになります。詩篇 100 篇は、礼拝に民を招き入れる爽やか且つ力強い響きを持っており、招詞で読み上げられるに最もふさわしい箇所と言えます。おそらく、書かれた時代背景となっているのは、捕囚からの帰国後、再建されたエルサレム神殿に詣でる人々の喜びを綴ったものでしょう。1～3 節では神殿に向かう人々の行列が歌い、4～5 節では神殿で彼らを迎える奉仕者たちが歌い返す。交読詩篇としてみても美しい内容です。本篇を基に作られた讚美歌は、4 番、5 番、557 番などがあります。

詩人が「全地よ」と呼びかけるとき、どこまでの世界が意識されていたのでしょうか。未だ天動説が主流だった時代、海の向こうに浮かぶ大陸や島々は認識されていなかったかもしれません。時代が進んでこの詩篇が改めて読まれるとき、その呼びかけは地球規模に拡大しています。

1～2 節の中で何度も聞こえてくる言葉は「喜び」です。同じ主日に全世界の民が心を合わせて主を賛美する喜び。神殿参詣とは形は異なれど、私たちは所属教会へとそれぞれの家から足を運びます。本篇の1～3 節を口ずさみながら集ってみるのもまた楽しいかもしれません。

3 節で言われているように、私たちは主によって造られた存在であり、それが主を礼拝する根本的な理由です。そして、主は「良い羊飼い」として群を養い、その群に属する一頭一頭の羊を心に留めてくださっています。ここで詩人が力を込めて「私たちは主のもの」「主の民」「その牧場の羊」と言っているところに、この世で傷を受けて歩んできた人々が自分の真のアイデンティティを取り戻そうとしている姿を見て取ることができるでしょう。礼拝とは、本当の自分に立ち返る場であり、自分の創造主を知ることこそまことの自分を知ることなのです。

神殿にぞろぞろと人々がやって来る姿を、主は目を細めて見ておられるのでしょうか。そして、主はご自身の奉仕者を立て、民を迎えるための賛美をそこに用意してくださいます。それが4～5 節です。門の前に立つ聖歌隊が、様々な楽器を手にして左右の道に勢揃いしている。「さあ、主

の庭に来たれ！」と。

子ども時代は教会で友だちに会えることが何よりの楽しみでした。私は牧師の子であったので、いつも「迎える側」ではありましたが、まだ教会に対する責任はなく気楽なものでした。今は毎週礼拝に集われる方々の安否が気にかかり、様々な現実と闘いながらも礼拝に来てくださった皆様に心からのエールを送る気持ちです。この神殿聖歌隊の一人であるかのように奉仕できる幸いを噛み締めています。

5節では「**いつくしみ**」「**恵み**」「**真実**」という主の美しい属性が組み合わせられています。23:6でも「**まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう**」とありました。その性質においてとこしえに変わることのないお方として、主が呈示されているのです。どんな時にも私たちを慈しみ、恵みの契約を守り続けてくださる主の真実に立ち返っていく、それが礼拝という場です。

皆様はその人生で「自分を見失う」という経験をしたことがあるでしょうか。自分が何者であるか、自分が何をしているのかが分からなくなってしまうことがあるのです。アイデンティティを喪失した人間が感じる恐ろしい虚無感は、できれば二度と経験したくないものです。しかし、人間は時にそのような状況に追いやられることがあります。そのような私たちが帰っていく場所として、礼拝が備えられています。「**知れ。【主】こそ神。主が、私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である**」（3節）と口ずさみながら、主の懐に飛び込んでまいりましょう。